「一陽来復」日本共産党愛知支部読者だより「虹」六四～六七号より（一九九二年）

一陽来復

福沢正男

私が桂子さんを見初めたのはもう五年も前だ。私が一六〇センチ位なのに対して彼女は一六五センチあった。肩幅があり、体格も豊かでそれを恥じる様子もなく大股で歩いた。しかし動作は緩慢で、話す言葉もゆったりとしているので人に威圧感を与えるようなことはない。彼女から受けた最初の印象は「美人だけど、大きなひとだなあ」というものであったが、しかしそれは必ずしも体格だけのことではなかった。何というか、心の広い人という気がしたのだ。

看護婦という職業は、彼女にとって天職であったかも知れない。若さと「心の広さ」から人の夜勤まで引き受けながら、友達どうしで話している時など、「ああ、もっと仕事がしたいわ」なんて言うのだ。

「病人の世話をすることがそんなに楽しいの？」

誰かがが聞くと、彼女は人にはわからないでしょうけどというように、ちょっと顔を背けて、しかし大きな美しい目でじっと相手を見据えながら、

「楽しいというのとはちょっと違うの。やりがいがあるっていうか、充実しているの」

確かに、看護婦というのは、私のような鉄工所の工員なんかとは違って、人を直接助ける仕事だから、人から感謝されることも多いだろう。でも、工員だって、どこかで人の役に立っているはずだよと、つい彼女に反論めいたことを言ったことがあったが、

「どんな職業だって人の役に立ってると思う。でも私は看護婦がいいの」

しぶしぶ、いやいや今の職業に就いている私にとっては、自分の仕事が好きだという桂子さんがちょっと憎らしかった。しかし、そんな彼女にだんだんと私は惹かれていった。

私は早くに父を亡くし、母の手で育てられた。高校は行ったものの、大した成績でもなかったので大学をあきらめ、ある乾物会社の経理課に就職した。初めは仕事がおもしろいと思い、何となく自分はこの会社で一生を過ごすのかなという気もしていた。が、二十二才の時、部下というか、同僚というか、K子という女性と恋愛ともつかない曖昧な交際を始めたが、彼女が同じ会社の部長の愛人だったとのうわさを聞き、そういう方面には疎い私は、あろうことか直接彼女に問い質してしまったのだ。そのとき彼女は、あきれたような軽蔑するような表情で私を睨みつけて、みんなに聞こえるように、

「そっか、うわさ信じてるんだ。っていうか知ってて付き合ってると思ってた。もういいわ」

と捨て台詞を吐いて席を蹴って行った。その時の私は、この上ないいい見世物だった。

やがて、私が会社の金を着服しているといったデマが社内をとびかうようになった。K子が流しているのは明らかだったが、私は彼女を問い詰めることができなかった。ついに私は会社を追われるようにしてやめることになった。上司の課長に辞表を提出した時も一言も遺留されなかった。

仕事と恋愛？という人生の二大問題の両方で躓いた私は、相当に落ち込んでいた。傷心の面持ちで、私は元気なく数ヶ月何もせず、家でゴロゴロしていた。母は私を気遣って何も言わなかったが、早く仕事を見つけて欲しいと思っていることは手に取るようにわかっていた。

失業保険の切れる一ヶ月前、私は思うところあって職業訓練校に入った。ここに入ると一年間は保険が保障され、比較的生活も安定するのだ。私が選んだ職種は溶接だった。

これまで経理事務という仕事をしてきた者がなぜ溶接などという百八十度の転換をしたのか、はっきり言って自分でもわからない。よほど前の会社での出来事に懲りて、とても同じ仕事には就きたくなかったのかもしれない。

訓練校は楽しかった。溶接という仕事も新鮮で面白そうだった。主としてガス溶接は切断、電気溶接は接合を意味した。鉄といえば堅いものの代表のようであるが、それがいとも簡単に穴が開いたり、切れたり、逆に接合したりできるのだ。

先生は初めは怖そうだった。ある先生などは「私の言うことを聞かなかった者の中にはハンマーを顔に受けて入院した者もいます」と挨拶して私たちを驚かせた。しかしそれは初めに生徒から舐められないようにと威すのであって、本当は優しい先生だということがすぐわかった。訓練校の生徒には中学を卒業してそのまま来ている者と、私のように雇用保険を受けながら学校にきているものとがいた。人数もそれぞれ二十人位づつほぼ同数であった。

「同級生」となった人達は、年齢こそばらばらだが、お互い平等で上下の隔てなく付き合えたので、いろんな経験話を交換した。ここで私は初めて社会を知ったような気がした。これまでいた会社は私にとって社会ではなかった。色々な人がいろいろなことを考えながら、それぞれの場所で働いている事が（そんな当たり前のことが）この学校でわかった。私は傷ついた心が次第に癒されていくのを感じていた。大げさにいえば生きる希望が湧いてきたのだ。

一年経って私は訓練校を卒業し、家の近くのある小さな鉄工所に就職した。一日中鉄と向き合っている、荒々しい殺風景な職場だが、女子のいない職場は気楽だった。昼休みの同僚たちの猥談もなんだか明るく聞こえてきた。

そんなころ、私はあるサークルで桂子さんと知り合ったのである。

私は、折を見て桂子さんに結婚を申し込むつもりでいた。が、十中八九、いや、九十九パーセント断られると思っていた。美人で性格もよく、仕事もできる人だから、きっとたくさんの縁談もあるに違いない。ひょっとするともう恋人か婚約者くらいいるかもしれない…。それでもよかった。生きていて彼女に会えただけでも幸せと思ったくらい、私は彼女に心酔していた。惚れるとか、愛するというのとはちょっと違った不思議な感情だった。

彼女は私にとって大げさでなく、人生の希望の象徴となっていた。しかし、また同じ失敗を繰り返すかもしれないという怖さもあった。

私たちの入っていたサークルは、最初、養護施設の慰問を主な活動として結成されたのだったが、やがてその活動を続けようとする者たちと、もっと自由に色々なことをしたいという者たちに分かれ、後者に属する人たちは独自にグループを作って独立していった。私はどちらかといえば桂子さんに誘われる形で前者に残ったのだが、その再出発の例会がある年の秋に行われた。その日の例会はサークル分裂後の余波もあって、分れていった人達への批判やお互いの意思の確認などで皆やや興奮ぎみだった。

例会の帰り道、いつものように私は桂子さんと同じ電車に乗って家路に着き、その電車の中で、『事な話』がある旨を告げた。

「え？なにかしら。大事な話って？」

「ここじゃちょっと…。今度落ち着いて話出来るところで、きちんと話したいんだ」

「そう…。じゃ、今度の日曜日、よかったらわたしのうちへ来てくださらない？」

これは私にとって実に意外な事だった。飛び上がらんばかりの気持を押えて、私は出来るだけ低い声で(自分でもわかるくらい声がうわずっていたから)答えた。

「じ、じゃ、そのとききっと話すよ。でもほんとにいいの？」
こうして私は思わぬ告白の機会を得ることになった。
運命の日曜日は晩秋の晴天であった。約束の時間は午後一時だった。
彼女の家はある私鉄沿線の小さな無人駅の近くにあった。一面に稲刈りの終わった田んぼの広がるのんびりした田舎で、私の住んでいる工場街とはずいぶん違っていた。電車を降りて改札口を出るともう桂子さんがジーパンにTシャツといったくつろいだ服装のまま迎えにきてくれていた。いつも街で会う服装とは違ったさっぱりしたいでたちで、髪もおさげにしていた。これが普段の桂子さんなのだと思った。私は彼女をいっそう身近な人に思われた。
道々、彼女は、自分の住む村の出来事を親しみを込めて語った。途中で会った人はすべて農家の人で、すべての人が桂子さんと挨拶をした。特に私を奇異な目で見る事もなかった。彼女の家も百姓家で、小さい頃から畑仕事を手伝いながら育ったという。
南向きの広い庭に面した居間に通された私は、桂子さんに手を曳かれて連れて来られた彼女のおばあちゃんに挨拶をした。八十五才になるというおばあちゃんは歯のない口で丁寧な長い挨拶を返された。その話の中で私は桂子さんのご両親が所用で、おばあちゃんと桂子さんが留守番なのだということを知った。
私たちは、しばし共通の話題であるサークルの話をした。それからお互いの家族や友人の話などをした。私は中々本題を切り出せずにいたが、なぜか彼女も特に促すようなことはしかった。
三時頃、おやつに桂子さんが焼いたという葡萄の入ったケーキと紅茶が出た。桂子さんはちょっと席をはずしていたが、私は結婚の話をいつ切り出そうかとそればかり考えていて正直お菓子どころではなかった。ふと、トイレを借りようと席を立ち、土間に降り立った。そこから庭に出てトイレを探したら、農家によくあるように庭の一角に汲み取りの便所が見えたのでそこに近づいて行った。そして私は大変なものを見てしまった。
桂子さんが便所の瓶の前にしゃがんで用を足していたのである。私は思わず「あっ」と声をあげてしまったので、桂子さんは「きゃっ」と驚いてあわてて下ろしていた下着をはきなおした。が、私は桂子さんの白い豊かなお尻をしっかり見てしまったのである。
「あ、ごめんなさい。僕も借りようかなと思って…」
私はなんとも間の抜けたことを言ってしまった。
「ええ、ど、どうぞ」
私とは目を合わせず真っ赤になりながら桂子さんはそそくさと家の中に逃げるように入って行った。私は絶望を感じていた。もういっときも早く帰ろうと決心した。
そこへ幸か不幸かご両親が帰って来て、私はますますあせりだした。私が必死になってお断りするのに対し、どうしても夕飯を食べていけというのである。桂子から聞いていながらどうしても抜けられない用で出掛けていたが、こうしてお目にかかれたのだからお詫びも兼ねてぜひと。
私が助けを求めるように桂子さんを見やると、彼女はさっきの椿事も忘れたようにくすくすと笑いながら、うなずいていた。その表情に救われたような気がして、私は夕飯を戴いていくことにした。
楽しい食事だった。お父さんは日焼けしたあさ黒い顔の陽気な人で、何度も何度も私のコップにビールを注いでくれた。お母さんは控えめな人だったが、いつも微笑を浮かべながら何くれとなく世話をしてくれた。私は歓待を受けたのである。
もう八時を回っていた。今度こそ帰らなくてはならない。すっかり当初の目的を逸してしまったが、

私はこれ以上何も望むまいという気持ちでいた。ご両親に心の底から篤くお礼を言って桂子さんの家を出た。彼女がコートを羽織って外まで送ってくれた。

「今日は、何ていうか、ありがとう。すっかり迷惑をかけてしまって…」

「ううん、また来てくださいね。父も母もずいぶん喜んでいたわ。若いお客さんが少ないせいもあるけど、あなたのことが気にいったみたい」

桂子さんに『あなた』と言われて私は緊張した。

「ね、よかったらちょっと歩かない？また帰り送るから」

思わず言っていた。心臓が鳴り出した。彼女はちょっと間をおいて、

「いいわよ」

といって、いったん家の中に入って行き、すぐに戻ってきた。私たちは暗い田舎道を向こうの方でぼんやり点いている駅の灯を目指すように歩きだした。今度こそ、私は躊躇しなかった。

「…あの、結婚してください」

「え？」

当然、彼女は聞き返した。

「ぼくと結婚してほしいんです。その…まあプロポーズというか…」

彼女はおし黙っていた。

（だめか！）

私は思った。目をつむった。

「はい」

「えっ？」

今度は私の方が聞き返した。もちろん私は『はい』の意味を理解したが、しかし信じられなかった。

「あの、結婚…してくれるんですか」

「はい」

「ぼくと結婚してくれるんですか？」

「はい、ふふ」

「……」

私は深い感動に襲われていた。

「わたしね、高垣君」

彼女はゆっくり、はずかしそうに話してくれた。

「わたし、あなたがわたしのこと想ってくれているんじゃないかと気付いていたの。ある日、ふっとそう思って。それから何となくいつか今日みたいな日が来ると思って。でも、もしそうでなかったら、わたし失恋するのかななんて……」

彼女は手で顔を覆って泣いていた。私も溢れる涙を止められなかった。

私は何も言わず、彼女の体を挟むようにして手を差しのべ、彼女の腰の向う側で自分の手首をつかみ、ぎゅっと彼女を抱きしめた。私の手は、彼女の着ていた厚手のコートの中に沈みこみ、その下に私は彼女の豊かな肉体を感じていた。彼女はされるままにしていたが、やがて腕を私の首に巻き付け、私を抱きしめてくれた。

「…こんな大きな奥さんでいいの？」

彼女がささやいた。彼女の顔が私の顔のすぐ横にあった。私は目をつむってこの瞬間を永遠に忘れないようにしようと懸命に彼女を抱きしめた。

（了）